慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田代和生著 近世日朝通交貿易史の研究 ; 岩橋勝著 近世日本物価史の研究
Sub Title	K. Tashiro, Studies on the history of the diplomatic relations and trade between Japan and Korea in 17th and 18th centuries ; M. Iwahashi, Studies on the price history in early modern Japan
Author	速水, 融
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.5 (1982. 10) ,p.804(144)- 808(148)
JaLC DOI	10.14991/001.19821001-0144
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821001-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田代和生著

『近世日朝通交貿易史の研究』

（創文社，1981年刊，7＋458＋48頁，7,000円）

岩橋　勝著

『近世日本物価史の研究』

（大原新生社，1981年刊，517＋24頁，15,000円）

1

1981年に出版された近世日本経済史に関する著作のなかで，この二つの著書は専門研究書として最もすぐれたものであることに賛意を表さない者はまずいないだろう。両著とも，著者が出版に至る十数年間の努力の結実であり，心血をそそいで完成された結果である。両著とも，今まで比較的研究史上，空白かそれに近い状態にあった分野を対象とされたものであるが，ともに，単にその空白を埋めたばかりではなく，近世日本経済史への新しい接近を大胆に試みるものであって，著者は中堅研究者として，あるべき姿を明確に打ち出している。

一見，両著は，関係のない分野の著作にみえる。事実，相互に，一方の文献がもう一方に引用されている箇処は，一箇処ずつであって，量的には関連がうすいようにみえても致方ない。しかし，この重なり合っている部分——それは江戸時代中期の貨幣流通に関する部分であるが——によって，この二つの研究は，ある意味で結びつけられているのであり，そのことが，評者をして両著を合わせて書評しようと思い立たせる糸口となった。

1976年6年に開かれた社会経済史学会は，共通論題として『新しい江戸時代史像を求めて——その社会経済史的接近——』をえらび，評者自身がオーガナイザーとして開かれたのであるが，この時，田代和生氏は「一七世紀後期～一八世紀日本銀の海外輸出——特に対馬・朝鮮ルートを中心に——」を，岩橋勝氏は，「徳川期米価の地域間格差と市場形成」を報告されている。[(1)] この報告は，それぞれの著書の核心部分となっていることを思うと，両著がこのような形で書評さるべき運命は，すでにその時に始まっていたともいえる。

しかし，“歴史”をいま一つさかのぼると，1974年12月，第2回数量経済史コンファレンスが開かれ，そこでも田代氏は，「徳川後期における金・銀・銅の輸出：1640年以降の銀輸出高と貨幣在高の再検討」を報告，この報告に対する討論者であった岩橋氏は，コメントを基に，「徳川時代の貨幣数量——佐藤忠三郎作成貨幣有高表の検討」を発表された経緯があるから，[(2)] 田代氏の貿易史研究と岩橋氏の物価史研究は，「貨幣」を媒介として，早くから結びつけられていたのである。私的経験をここに記すことは当を得ないかもしれないが，このコンファレンスに出席した評者自身，全く初対面の両氏が，会場に到着するや否や，荷物もおろさず，つっ立ったまま1時間も議論をやり合っていた光景をまざまざと思い出すことができる。

このように，貨幣——その鋳造，流通——を介して，貿易と物価は結びつくのであり，両著者の問題関心が重なり合うところもその点にあるのは当然である。岩橋氏による田代氏の著書に対する書評[(3)]も，主にこの点に関する理解をめぐってなされている。

とはいえ両著書は，もちろん独立に出版され，著者のアプローチもそれぞれ自身の立場からなされているので，二つの著書を，全く合評することはできないし，またすべきでもない。ただ評者は上記の経緯を知る者として，またある意味では，徳川日本が，前工業化社会としてはむしろ異常なほどに，貨幣が広く流通し，それを素材として商業・貿易が行われ，市場形成が進んでいた社会であったことの力強い証拠として，両著書の関連をまず明らかにしたかったのである。

2

田代氏の著書は，すでにいくつかの書評にみられる

注（1） 両報告とも，社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて——その社会経済史的接近——』（東洋経済新報社，1977年）に収録。

（2） 両報告とも，梅村又次他編『数量経済史論集1　日本経済の発展』（日本経済新聞社，1976年）に収録。

（3） 一橋大学経済研究所編集「経済研究」33巻2号（1982）所収。

が如く，江戸時代前半の日本・朝鮮間の国際関係を，通交・貿易の両面から総合的にとらえようとしたものである。従来，そしてまたごく最近になって，江戸時代には，日本の徳川幕府と朝鮮の李朝との間に，対等な（当時の言葉を用いれば，交隣）関係が結ばれ，とくに李朝から日本に渡来する通信使（この言葉自体，東アジア国際関係においては，交隣関係にある国どうしの使節を意味していて，決して朝貢関係ではなかったことを物語っている。）の華麗な行列図が紹介されたり，歴史上，二つの国の間に存在した友好関係を示す証拠としてとりあげられてきた。田代氏の著書は，もちろんそのことの意味を十分認めた上で，このような歴史の表面に出ている外交関係を実際に準備し，幕府と李朝という二つの国の国家主権を取り結ぶ実際の推進者，対馬藩，あるいは大名宗氏の役割について大部分の頁数を割いている。

宗家の記録は，厖大な量にのぼり，東京，対馬，ソウルの各地に分散所蔵されているのであるが，著者は，十数年間をそれら史料の探索と整理・分析に投入し，今まで全く誰もなしえなかった近世日朝関係の実像を描き出すことに成功した。対馬藩は，釜山の草梁に，「倭館」と呼ばれた居住区を設けることを李朝から認められ，数百人の役人，商人，僧侶等が常駐して，外交実務や交易を，李朝の対外関係取扱い機関である礼曹の間で進めていたのである。

寛永年間に，「柳川一件」として知られる国書改ざん事件が発覚し，対朝鮮外交を対馬藩に委せ切りにできなくなった幕府は，対馬藩の城下町，府中（厳原）に幕府を代表する禅僧を派遣して（以酊庵輪番僧）外交文書の検閲にあたらせたが，実際には，文書はすでに倭館でチェックされており，輪番僧自身による外交折衝はほとんど行われなかった。

加えて，貿易になると，長崎貿易とは全く異なって，幕府はいわば「手の下しようもなかった」のであり，輸出入の品目，数量の統制は実質的には後述する貿易用特鋳銀の鋳造に至るまで，全く行いえなかったのである。その結果，長崎貿易が17世紀の第3四半世紀をすぎるあたりから，銀貨幣の国外流出を憂えた幕府の手により，輸出銀の制限強化，禁止という手段を通じて縮小に向ったのに対し，倭館貿易は逆にその穴を埋めるべく，1680年代以降，急速に増大さえみせている。

このように，幕藩制という中央集権のあいまいさの故に，オモテに出た外交と，ウラでの実務，そして貿易が使いわけられることにより，対馬藩は日本と朝鮮という二つの国家間の関係の潤滑剤として，たくみに生きぬき，少くとも江戸時代前半については厖大な貿易利潤をあげていた。

倭館における貿易仕法についての著者の研究に従えば，形式上は，進上・回賜という朝貢形式をとりながら，とくに寛永12年（1635）に確立された「兼帯の制」は，当初の朝鮮側から申し出た理由――接待費節減――とは独立に，貿易を外交や儀式から分離させ，貿易をスムーズに展開させる一種の「合理化」という結果を生んだ。また，対馬藩内においても，天和3年（1683）に設置された元方役は，倭館への渡航者・貿易参加者を規制することによって，貿易利潤を藩財政に結びつけるという対馬藩の「商社化」を意味する改革であった。

倭館貿易の特長の一つは，主要輸出品が，18世紀の30年代まで，銀，それも幕府鋳造の銀貨幣（丁銀）であったことである。（1684～1710年の間，丁銀の輸出品に占める構成比率は55％であった。）銀貨幣が，秤量貨幣であり，幕府管轄の銀座で鋳造され，刻印が打たれるということは，それが，政府によって品質を保証された銀塊を意味し，一種の商品として輸出されたのだ，と著者は主張している。このことは，さまざまな問題を生むことになる。まず，元禄8年（1695）に始まる幕府の鋳造貨幣の品位下落である。元禄改鋳により，品位は80％から64％へと下落し，商品としての価値はそれだけ減価する。対馬藩は朝鮮当局と折衝して，この時はともかく従来の27％加歩という条件で妥結させたが，つづく宝永期の悪鋳――50％から，ついに20％という極端な低品位通貨の出現となる――は，商品としての銀貨の受取り拒否をまねき，財政収入を大きく倭館貿易に依存する対馬藩にとっては，死活問題とさえなったのである。対馬藩は幕府と交渉の末，結局は，純銀量80％という交易用特鋳銀の鋳造を認めさせる。この経緯を，(1)極端な低品位通貨の鋳造というさなかに，その方針と全く逆の高品位貿易銀の鋳造が行われたこと，(2)この問題をめぐって，幕府の政策顧問として登場してきた新井白石と，対馬藩の利益を代表する同藩の儒者雨森芳洲との間に，'火の出るような' 激論が闘わさ

れたこと，という脈絡のなかで考えると，重要な歴史的示唆を与えてくれる。第一の問題は，幕府の貨幣鋳造の原則に反してまで特鋳銀を鋳造し，倭館貿易を続行させることを認めた幕府の意図は何であったのか，ということである。第二の問題は，中央政府の立場から金銀は一度流出してしまえば，再び戻っては来ないものだとして，その流出を抑制し国内に金銀財宝を蓄えることによって一国の富裕を図ろうという考えを持っていた白石と，ともかく貿易こそが自藩の存立基盤であり，また李朝朝鮮と交隣関係を保ち，日本の防備の最前線にある対馬の特殊事情を考慮して銀輸出を認めよという芳洲——しかも二人は木下順庵の同門の弟子であった——の間の論争である。これからほとんど同時代に行われたイギリスの重商主義論争——金銀輸出の禁止を主張する重金主義者（ブリオニスト）と，一国全体としての輸出入差額こそが決定的で，一時的な他国への金銀輸出は，貿易量の増大のためには認められるべきだとする貿易差額論者（バランス オヴ トレード）との間の——を思い浮かばせる。ただし，イギリスとの違いは，日本の場合，国内に金銀を蓄積する方策が，主要輸出品（＝銀）の輸出抑制，ないしは禁止，したがって貿易の縮小であったのに対して，イギリスの場合は，その拡大によった，ということである。これはいうまでもなく，日本が，その時点では，銀の他に主な輸出品がなかったことによる。

ところで，幕府に特鋳銀鋳造を認めさせたことは，一時的には対馬藩の勝利を意味したが，特鋳銀以外の良質丁銀の入手が困難になると，対馬藩の貿易は，幕府の特鋳銀鋳造量に依存せざるをえない状況になる。そして，国内産銀が減少し，一方国内での銀需要が，貨幣経済の進展とともに増大すると，おそかれ早かれ，幕府の特鋳銀鋳造は中止され，対馬藩の朝鮮貿易は大きな痛手をこうむることになる。銀以外の輸出品として，銅が主要な部分を占めるようになる。しかし，何といっても，銀は，朝鮮の中国（清）に対する朝貢貿易の必要品であったから，銅は，銀ほどには需要はなかった。かくして18世紀後半になると，倭館貿易は衰退期に入り，幕末まで回復をみなかった。

朝鮮経由で中国に吸いこまれていった銀の対価として，何よりも重要なのは白糸であり，長崎経由で輸入される白糸と競合しながら，主として京都西陣の高級織物原料として使用された。この他朝鮮人参も，江戸時代の日本人には回精剤として人気が高く（このため，特鋳銀の本来の名称は「人参代往古銀」と呼ばれている）主要輸入品を構成している。著者はこれらの輸入品の国内販売の組織もとりあげ検討している。

重要なことは，この倭館貿易が，ただ単に日本—朝鮮二国間の貿易であったのではなく，中国や東南アジア産の産物をも対象とするところから，著者のいう東アジア通商圏の一部となっていた，という点である。これは，従来の「鎖国」史観，あるいは貿易を長崎で行われる例外的な事象であるという通念を打破し，外国貿易が近世日本の経済に——たとえば正徳・享保銀全鋳造量の1割近くもが海外流出したというような形で——，組みこまれていたという積極的評価を与える点，斬新なものといえるだろう。しかもその貿易の仕法が，東アジアの伝統的朝貢貿易を，型式的には踏まえつつ，実質的には，それとは異なり，いわば「近世型」とでもいうべき貿易を展開している点が注目される。およそ近代社会の形成は，国家形成が進む一方，政治・経済・外交といった人間活動の局面が統合されたものから分離し，分離された上で相互に多様な関係を持つようになる過程を踏むわけであるが，本書を通じて，近世の東北アジアで，伝統的な政経未分離の国際関係が，徐々にではあるが，分離への方向に向って動き出していたことを読みとることができる。

3

岩橋氏の労作は，近世の物価の中でも最も中心的で，従ってデータも多い米価を中心として，全国各地の米価変動の時系列データを丹念に収集し，その比較検討を通じて価格変動の同時性を検出し，全国市場形成の過程を明らかにしようとされたものである。米価に関するデータは，存在するといっても個々バラバラであり，それらを収集し，比較可能な形にととのえ，基礎統計を作成するだけでも莫大なエネルギーを要する仕事である。近世物価史の研究に関しては，さきに新保博氏による業績があり(4)，これによって近世後期の物価

注（4） 新保博『近世の物価と経済発展——前工業化社会への数量的接近』（東洋経済新報社，1978年）。

水準，とくに食糧生産物と非食糧生産物の相対価格の変動を通じ，1820年頃を境とする経済発展の始動が主張されている。そこで利用された史料は，江戸・京都・大坂三都，とくに大坂の物価で，その観察を通じ，「価格革命」，近代の経済成長を準備する発展をみせた，とするのが，一言で表現すれば，氏の結論であった。

岩橋氏は，これに対して対象を米価に限り，東日本から五つ（江戸，出羽，名古屋，信州，会津），西日本から八つ（広島，佐賀，大坂，近江，播州，福知山，防長，熊本）の系列を得てトレンドを作成されている。近世最大の米産地，北陸地方のデータを欠くのは惜しいが，これによってほぼ全国がカヴァーされている。370～371ページに所収された図7-2，各地米価トレンドが，本書の白眉ともいうべき表であり，江戸・名古屋・会津については17世紀後半から，他の10か所については18世紀初頭から1861年までの推移を11か年移動四分位中位置法を用いて示されている。この図は，「各地米価の水準差を捨象した」推移，すなわち各地間の米価の連動性についての観察が一見容易にできるように作図されている。

図をみると，1830年代の出羽のような少数の例外を除き，大勢としては全国米価は並行的に変動しているようにみえる。しかし著者は慎重に早急な結論を避けている。というのは，米価の表示に金建てと銀建ての二系列があり，金銀相場の変動を考慮しなければならないからである。とくに17世紀末から1730年代にかけての大きな変動は，さきに述べた貨幣改鋳とからんでおり，デフレーターを用いての標準化は甚だ困難なところである。

一方，水準差の地域的特性をみると，金建て圏では高い順に名古屋・江戸・大坂（金建て）・会津・信州・出羽となっていて，すでにこの時期から，消費地帯としての江戸・名古屋・大坂と，生産地帯との間で相当の価格差が生じていたことが示されている。出羽の例をとると，平均して江戸米価の60～70%で推移していた。大坂を中心とする銀建て圏では，「瀬戸内海沿岸地帯では大坂なみか，それを上まわる米価水準が存在していた。つまり西日本の米集荷市場が大坂だけの単一市場ではなく，瀬戸内一帯を大きな核とする市場であったことが推測される」としている。この指摘の持つ意味は非常に重要である。何故なら，この指摘は従来，江戸時代の米市場を専ら大坂堂島の米市場に限定して考えてきたことへの挑戦だからである。

さて著者は，本文の末尾で，「貨幣改鋳の影響（ここでは貨幣数量の増減）と自然的要因とを可能な限り除去した実質米価トレンド曲線」を大胆にも提示している。これによると，1600年以降，1670年まで実質米価は約5倍に騰貴していたのが，その後はゆるやかな低落傾向に入り，1780年代から1810年の間の微上昇期を経て再び下降する。1860年代の水準は，ピーク朝の半分以下である。江戸時代の社会・経済の中で持つ米の意義を考えるならば，この推移は色々な意味で，既存の江戸時代史像へ大きな疑問を投げかけるものである。

しかし，ここでも著者は抑制的である。実質米価を求めるに際して，著者は貨幣の流通速度と取引量を不変としたこと（この限り，著者は貨幣数量説に立っているように思われる）から，その留保づきで，「一七世紀の米価高騰はなによりも，この期の人口増加によるものであり，同世紀末以降の長期低落傾向は，取引規模の拡大，ひいては市場経済の拡大と発展をあらわしている」と，「大まか」な解釈を下している。

そしてこの市場経済の拡大とは，旧来いわれてきたように，大坂，ないしは江戸という点を中心とする形ではなく，「近世前期から点と点を結ぶ線的方向で発展し，後期に向けて地方市場全体へも広がる面的発展をとげ」ているのである。

4

以上のように両著は，何よりも綿密な実証研究であるが，ただ単に史料を並べた疑似的実証研究ではなく，一方はいわゆる「鎖国」史観への疑問の提示と，東北アジア通交貿易という国際秩序の形成への展望，他方は，米価の地域間格差と時系列分析を通じてイメージアップされる新しい徳川日本の経済像という，大胆にして積極的な提言を行っているのである。

もちろん，著者達も認めるように，このような提言が完全に検証されているわけではない。むしろ逆に，著者達は史料の読みこみ，統計系列の作製のなかから，個別研究のワクをこえた全体史的展望を開いたのではないか，と評者は考える。それだけに本書は重厚であ

り，斬新ながらオーソドックスな手法によって，江戸時代史に新たな貢献と提言を加えることに成功したのだ，といえよう。評者は，両著に対し何らかの批判点を見出すべく，頁をくったが，ついに根本的な疑問点を見出すことはできなかった。強いていうなら前者に対しては，それほどまでに多かった対馬藩の貿易利潤が，誰に，どういう型で配分されたのか，又，それが衰退に向った時，どのような混乱が生じ，それをいかに解決したのか，についての検討があれば，と考える。又，後者に対しては，明治初期の，単一貨幣額表示のもとで調査された各地の米価の地域差と連結してみれば，おそらく日本海側の低米価地帯は，米のモノカルチュア地帯としてはっきり位置づけられたであろうし，他のたとえば養蚕地帯などでは，需要の大きさが，おそらく米価をつりあげ，近代的大量輸送手段の導入以前における，プロト工業化期の食糧価格と産業について，全国的見通しを得ることができたのではなかったろうか，と考える。しかしこれらは，いわば望蜀の願いであって，そのことによって両者の価値をいささかも減ずるものではない。

速水　融
（経済学部教授）